

# 矛盾の心理学

福島 淳 イラスト・福島マルゲリータ

自分自身をコントロールしているのは何なのだろうか？  
無意識にとうとう行動、そこから生まれる矛盾とは。



普通、自分自身の行動スタイルは、自分で決定していると思ってる。ところが、自分では気が付かない所で、思ってもみないことをしている場合がある。我々は、無意識のうち本来の行動スタイルとは違う選択をすることもあるのだ。もし意識していれば、そう決断していなかったかもしれない。例をあげて考えてみよう。

最近、ぼんやりと電車に乗っていた時のこと。何気なく前に座っている人を見ていて、突然頭がシャキとなりました。正面に座っていた20代後半の女性のパンツが丸見えだったからだ。きちんとした身なりで知性的な顔立ちの、いわゆるキャリアウーマンタイプ。両足をきちとそろえ、バッグを膝の上に乗せていたのだが、ややミニ気味のスカート前中央にスリットが入っていたのである。

ここでひとつの仮説を立ててみよう。例えば彼女は、ふだん理性的な言動をしている人で、男性が少しでもマシな話題を持ちかけると、その人を軽蔑するようなお堅い性格の持ち主だとする。それなのに、なぜ座るとパンツが丸見えになるスカートを買ってしまったのだろうか。

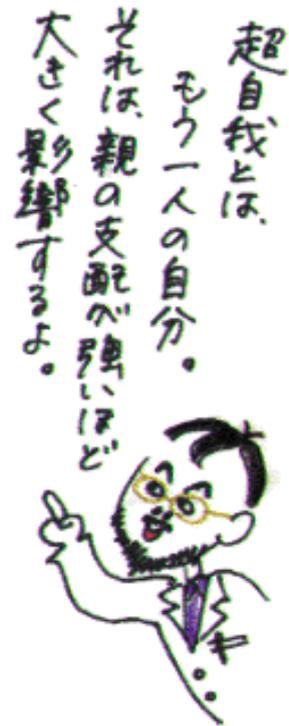
さらに仮説を進めてみる。実は彼女は、まじめでお堅い人ではなく、本当はマシな側面も持つありふれた人間かもしれない。この仮説の下では、次のような理屈が成立する。一般的に、人は成長の過程で、両親の叱責や脅し、禁止あるいはその後の教育による道徳感情の取り入れにより、性的な衝動も含む本能的な衝動を、意識から抑圧してしまふことを覚える。つまり本能衝動を、無意識の世界に閉じ込めるわけだ。

この作用をするのは超自我といわれるも

ので、フロイトは「良心、自己観察、理想形成」の3つを掲げている。平たく言うと、超自我は「もう一人の私」なのだ。この「私」は、親の道徳感情などに支配され、自分の精神的自由を束縛する存在でもある。

さて、電車の女性だが、彼女は自分へ自我を抑えつける超自我が存在するおかげで、意識の上では自身をまじめで保守的なタイプと思ってる。しかし、このスカートをかう時、超自我によつて無意識に抑圧されていた衝動が、つい表面に出てしまったとは考えられないだろうか。ひょっとしたら、口頃過剰に抑圧されていたとすれば、反動的に露出過剰なものを選んでしまふという可能性もある。殆どの人は、こういった物を見ても「私には似合わない」とか人目を気にして買つことはない。これは、成長の過程で主に母親の影響を受け、衣服に対する母親の好みを自分の好みと錯覚させられている為に起こる現象だ。つまり、超自我のなせる技なのである。たとえば「自分は買わない」と思ったとしても、目に留まるという事実そのものが、本能的に求めているかもしれないのだ。

中には、買ってしまったことで一時的に抑圧されていた本能的衝動が満たされ、タンスの中に仕舞い込んでしまふ人もいるだろう。使うことのない物をなぜ買つのかと、このような行動は周囲の人には一見無駄に見えるに違いない。当の本人も、無駄な買い物をしたと思うかもしれないし、買ったことさえ忘れるかもしれない。しかし、買つことで本能的衝動の持っていたエネルギーが発散され、精神的に落ち着くといった効果があるのだ。こういった、内面における矛盾について考



例) 服を買う時、  
もう一人の自分(超自我)が  
母親のOKしそうな方を  
選ばせたりする。

三井

えると、すべての人が何らかの形で矛盾した言動を行なっていることだろう。

「」で、興味深い例を記してみる。先ず、南海の孤島での話だ。そこは常夏の気候のため、衣服の必要性が低く、魚もよく獲れ農作物にも恵まれていた。その上、性に関するタブーも存在しない。つまり衣食住に困らず、本能的衝動を満たしてくれる環境が整っていたのだった。その結果と思われるが、住人にはいわゆる神経症やノイローゼといった病気が、全く存在しなかつたのである。

次はインドの奥地での話だ。その地をキリスト教布教のために訪れた宣教師は、「青年の家」という変わった儀式の行なわれる所を報告している。そこでは、適齢期を迎え婚約すると、お互い別々の「青年の家」で別々の異性と共同生活を行なうのだ。本人の意思とは関係なく、毎晩違う組み合わせで夜を共にするのである。宣教師は、その報告の中で、西洋的発想では考えられない儀式に驚くと同時に、そこでは性犯罪がないことにも注目していた。

この2例は、ほぼ西洋的発想で暮らしている我々には、全く現実味のない話に聞こえるだろう。不道徳だと怒りさえ覚える人も多いに違いない。しかし視点を変えてみれば、この話を非常識と一方的に判断して議論の余地なしとしてしまつた人が、実は一つの規範や道徳に縛られた、つまり精神的な自由から束縛を受けている人とも言える。

見方を変えて「これらの話から、我々が得られるものはないだろうか」と考えてみよう。常識、道徳、規律。こういった物は、全て後から人工的に作られたものばかりだ。

絶対にこうだ、これこそ常識、これ以外に真実は存在しない、そつ思い込んでいただけの話ではないだろうか？

常識や道徳は、何故そついつつになつたのか、よく考えてみる必要がある。以前にも書き述べたが、常識や道徳の中には、人間のねたみが作り出した幻影も少なくない。それだけでなく我々は、成長の段階で、ひとつの枠組みの中に入るように教育されてしまふ。何となくこうなんだと思わされてしまつていることも多いはずだ。そして、その枠からはずれれることを恐れ、個性的であることよりも、皆に溶け込み目立たない存在であることに安心感を覚えるのである。そのため矛盾が生まれ、病気になるたり、社会から脱落してしまふ人もいるだろう。

最近、後ればせながら男女雇用機会均等法が成立した。男女は役割分担をするのはいいにしろ、当然平等である。しかし、こういう話を聞いたことがある。ある女性は結婚するまで貞節を守るうとした。白分の商品価値が高まると考えたのである。一方、男性にも手付かずの新品をありがたがる人がいることも事実である。男女は平等であるという社会においては、男性が女性に対して、いや男女関係や結婚に対して抱いている幻想が、ひとつの矛盾になつている良い例ではないか。男女関係が本当に平等であれば、元からこついつつ発想は両者ともにならないはずである。

今一度、我々が「そつに違いない」と思いついて入っている事柄や社会の常識について、何故そつなのか、よく考えてみる必要があるのではないだろうか？ それらが、多くの矛盾の原因になつているかもしれないからだ。